

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾くかかりでした。けれどもあんまりじょうずでないどころではなくじつはなかまの楽手の中ではいちばんへたでしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

ひるすぎみんなは楽屋にまるくならんでこんどの町の音楽会へ出す第六交響曲の練習をしていました。

トランペットはいつしようけんめい歌っています。

クラリネットもボーボーとそれにてつだっています。

バイオリンもいろいろ風のように鳴っています。

ゴーシュも口をりんとむすんで、目をさらのうにして楽譜を見つめながら、もう一心に弾いています。

にわかに、ぱたっと楽長が両手を鳴らしました。

みんなぴたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテティ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今のところの少し前のところからやりなおしました。ゴーシュは顔をまっ赤にして、ひたいにあせを出しながら、やつと今言われたところをとおりました。ほつと安心しながら、つづけてひいていますと、楽長がまた手をぱつとうちました。

「セロっ。糸が合わない。こまるなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなはきのどくそうにして、わざとじぶんの譜をのぞきこんだり、じぶんの楽器をはじいてみたりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュもわるいのですが、セロもずいぶんわるいのでした。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげていつしようと、楽長がおどすような形をして、またぱたっと手をうちました。またかとゴーシュはどきつとしました。が、ありがたいことにはこんどはべつの人でした。ゴーシュはそこで、さつき自分の時みんながしたように、わざとじぶんの譜へ目を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今のつぎ。はいっ。」

そらと思ってひきだしたかと思うと、いきなり楽長があしをどんどんふんで、どなりだしました。

「だめだ。まるでなつていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。ょくん。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっている僕らが、あの金靴鍛冶だの砂糖屋のでつちなんかのよりあつまりに負けてしまったら、いったいわれわれの面目はどう